

生き続ける建築―6



内田祥三

Yoshikazu Uchida

『建築』1996年2月号

都市と建築のあらゆる問題を背負い、終戦を挟んだ昭和の建築界を牽引した内田祥三、その名を知らない人はいないだろう。

東京大学総長にして、建築界で4人目の文化勲章受章者でもある。

だがしかし、その人間像や建築家としての実績は、意外にもあまり知られていない。

代表作は銀杏並木の先に「安田講堂」を配した東京大学本郷キャンパス計画。

やがて、建築から都市計画の法整備に深くかかわるようになっていくが、

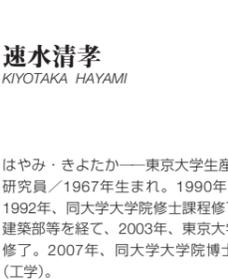
そこには、どのような契機があったのだろう。

そして、震災の経験から防火、耐震にも執念を燃やし、木造モルタルの採用、

鉄筋コンクリート化へと、建築の安全性についても多くの業績を残した。

アカデミズムと実践を両立させた、建築家・内田祥三の実像に迫った。

日本の建築と都市の行くかたを決めた巨人



『建築』1996年2月号

はやみ・きよたか―東京大学生産技術研究所 博士 研究員／1967年生まれ。1990年、千葉大学卒業。1992年、同大学院修士課程修了。郵政大臣官房建築部等を経て、2003年、東京大学大学院修士課程修了。2007年、同大学院博士課程修了。博士（工学）。

主な論文：「日本の建築設計者の職能と法制に関する歴史的研究」（東京大学博士論文 2007）など。

【*1】辰野金吾（1854～1919）建築家。佐賀県出身。1879年、工部大卒。建築界のあらゆる要職を歴任した。作品に「日本銀行」（1896）、「東京駅」（1914）など

【*2】佐野利器（1880～1956）建築構造学者。山形県出身。1903年、東京帝大卒。芸術としての建築でなく、工学としての建築を標榜し、構造学を発展させた。作品に「丸善」（1909）など。

【*3】久留正道（1855～1914）建築家。東京都出身。1881年、工部大卒。作品に「帝國図書館」（1906）、「東京音楽学校奏楽堂」（1890）他、文部省技師として全国の旧制高校などを設計

【*4】『内田祥三先生作品集』（内田祥三先生盾寿祝賀記念作品集刊行会、鹿島研究所出版会 1969）

【*5】小島憲之（1857～1918）建築家。栃木県出身。大学南校中退後、渡米し、1879年、コーネル大卒。工部大出身者に占められた建築界においては傍流となり、建築家としては不遇に終わるも、語学に長け、教育者としては一高で夏目漱石らを育てる

【*6】内田祥三・関野克「続建築60年 第一夜」『建築夜話』1966.2.6（ラジオ）

【*7】内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録（1）」『東京大学史紀要』No.19、2001.3

【*8】内田の口癖。「～しておもらいたい」は、～してほしいの意

■●■ 「内田祥三」の誕生

東京、本郷にある東京大学キャンパス。

今日ここに私たちが見る一群の建築は、関東大震災の少し前から第二次世界大戦までの間に、ひとりの建築家の指揮でつくられた。彼の以後、折に触れて続く建設にも、骨格はそのまま、である。

内田祥三。よしかずと読む。明治の辰野金吾【*1】、大正の佐野利器【*2】の跡を受け、終戦を挟み昭和の建築界に君臨した巨人である。建築に携わるなら、程度の差こそあれ知らなければモグリというほどの人――。建築家としてはいわゆる名人上手のたぐいではない。が、それでも、これほど知られる建築を、群として遺した人もまたあるまい。

内田は、明治18年（1885）、深川の米商いの家に生まれた。幼くして丁稚奉公に出るはずのところ、進学を勧められ、開成中学・一高を経て、明治37年（1904）、東京帝国大学工科大学建築学科に入った。

友人の父で建築家の久留正道【*3】に導かれた選択も【*4】、いざ入ってみて驚く。というのも、この頃の建築学科は「絵が成果」で、にもかかわらず「私は本来絵を書くようなことはしたことがない」からだ。正しくは、一高で小島憲之【*5】から製図の手ほどきを受けていた内田がそこで目にしたものは、絵そのものと呼ぶべき卒業計画だったのである。深い隔たりに、「たいへんなところに入った」、「辞めようか」【*6】、そんな考えすら頭をもたげるが、似た経験を持つ佐野に自身を重ね、奮い立ち、多くの習作を積むことでこれを克服していった【*7】。

母の意のままに丁稚に行っていたなら、また、挫折し、道を違えていたなら、内田の、はおろか、日本の建築界のその後もどうなっていたか分からない。

明治40年（1907）、建築音響をテーマに卒業論文を書き、その反映とおぼしき卒業計画（「劇場」）で大学を出た内田は、三菱合資での3年の現場を経て大学院に戻る。そこで鉄筋コンクリート構造の研究に取り組み、以後、東大を活躍の場としていくが、渋い面持ちで「～しておもらいたい」【*8】と恭しく語り、定刻前には教室に現れ、規則正しく学

内を動く、謹厳そのものの姿に、周囲は尊敬とともに畏怖の念すら抱いたといわれる。

自らを“何でも屋”と語る内田は、その言に違わず何でもやった。確かに、この時代の建築と都市にまつわるあらゆる場面に、ことごとく内田がいる。時に、何から何まで手を下すことにつながり、会長時代の建築学会では、「会長だか主計だか」【*9】分からなかったとまで言われたほどに。生来の律義さと、講演や講義をこまめに稿にし、また資料を「しょうりょう」し、整理よく保管するといった陰の努力がそれを支え、豊富な仕事が円滑さを伴って残された。

それにしても、万事にわたるそうした姿勢はどうつくられたのだろうか。それを東大入学後に求めると、曾禰達蔵【*10】と佐野利器の影響が浮かんでくる。

市街地建築物法【*11】（1919）と都市計画法（1919）の誕生に深く携わった内田の法規とのかかわりは、曾禰らの下で東京市建築條例案（1913）を編んだことに始まる。17カ国40都市の法を集め、翻訳し、日本の実情に照らし、成案を求めた。ここで、膨大な作業にも慌てず一つひとつ進める曾禰に、周到さを学ぶ【*12】。

一方の佐野には、合理主義者で強い信念に基づく行動力を始め、さまざまに啓発された。しかしながら、いかんせん喧嘩っ早くて、さきざきでぶつかっては席を立つ負の一面を持ち合わせた。その下にいた宿命で、慎重さは堅固となったに違いない。教授陣の退官が続く中、佐野までもが学内の衝突などで突如東大を去るという事態に出くわしても【*13】（1929）、「建築学科はこのままでは潰れると思った」と振り返ったほどの危機を、結果から見れば好機に変え、再建を果たしていった。

■●■

建築家の本領たる郡造形

本郷の建築群は、ちょうどそうした時期に当たる。

内田は、しばらく前から想を練っていたキャンパスの再開発計画を、課長を兼ねる営繕課で、実現に向けて巧みに動く。震災によって再開発は期せずして復興となるが、この災難もまた千載一遇の好機に変え、同課を後進育成の場に充てながら、一気に進めた。

まず、それまで正門付近にあった広大な前庭を惜しげもなく潰す。既に建て詰まりとなっていたキャンパスにとって貴重な広がりではあるものの、それによって軒を連ねることを強いられた校舎群は、類焼に弱く、ことごとく焼けたのである。この弱点を克服すべく、前庭に代えて、新たな建物にはそれぞれに十分な空地を取ることにしてバロック的な軸線を縁取り、それを銀杏並木で強調することで明確な骨格を与えた。

その象徴的な構想が、正門の突き当たりに大講堂を配し、これと直交する軸の両端に図書館と博物館を置くというもので【*14】、ロックフェラーの寄付によった図書館に比べ、博物館は不十分にとどまるものの、他もこれに倣い進められた。こうして、震災の以前、いささか散文的ですらあったキャンパスは、現在見るかたちに変えられていったのである。

構造については、震災にもびくともしなかった「工学部二号館」（1924）で自信を付け、ひたすら鉄筋コンクリートで通す。東大病院では、居住性への不安から、木造で、と懇願されてもこれを蹴飛ばし、「任された以上、業者の選定・契約はおろか、設計についても一切口は挟ませない」【*15】、と佳き時代の建築家の在り方を押し通した。

それでも、カレッジ・ゴシックを基調とした意匠は、既に様式主義をはるかに超えて、モダニズムに突入していた建築界の潮流からは時代遅れになっていた。「個々のデザインに対する批判は甘んじて受ける」と語ってもいるが、その一方で「建築は1つ1つではダメだ。配置が大事だ。全体の構想こそ建築家の本領だ」と言い【*16】、潤いを与える演出をぬかりなく加えながら、自身に誇れる群造形を築き上げていった。

そうして育んだキャンパスであったから、総長となって迎えた終戦の前後、陸軍と米軍による2度の接収要請を迎え撃った心の裡には、「この場所こそわれわれの死所と考えて」【*17】、という大学人の心意気ばかりでなく、設計者の心情も強くあったことは疑うべくもない。大講堂に「催弾箭が打ち込まれたり、放水されるのをじっと見て」【*18】いた東大紛争（1968）にあってもそれは同じであっただろう。

■●■

住宅と鉄筋コンクリート

内田の作品は、戦前に集中する。その量たるや、風貌に似つかわしくない“売れっ子作



上―東京大学大講堂正面外観（1995年撮影、下―

内田による同正面図案（東大建築学科所蔵）「安田講堂」の通称で知られるこの建物は、設計者に岸田日出刃の名も挙がる。実施案以前の内田案（下）には、「goth式ガ余リニ鮮明ナルコトガ如何ナルモ□□や佐野」と付される。この後、岸田のE.メンデルゾーン好きにいささか閉口させられる内田だが、大講堂で自家を捨て、似た構成で外観の異なる岸田案を推すに至る背後には、佐野のこの意見があったことになる。なお、平成8年（1996）、登録有形文化財の東京都第1号となった

表紙図版―東京大学大講堂室内 東大紛争で傷つき、以後長く閉鎖されるも、昭和63年（1988）に始まる改修によって原状を回復。昭和44年（1969）以来行われていなかったこの講堂での卒業式もこうして、平成3年（1991）、復活した。音響に効果ありとみて採用した、ワイヤーを使った光天井が美しい。舞台壁画は、小杉未醒（のち放庵）による「湧水」（左）と「彩果」（右）。知が湧き、果を採る、の図

表紙図版―東京大学大講堂室内

【*9】師と友 建築をめぐる人々』森井健介著（鹿島出版会 1967）

【*10】曾禰達蔵（1852～1937）

建築家。東京都出身。1879年、工部大卒。（『INAX REPORT』No.167、2006.7、p.4～参照）

【*11】大正8年法律第37号。同法の全面改訂となる建築基準法（昭和25年法律第201号）の立案に当たり、建設省でこれを担当する者たちは、何よりもまず最初に、内田のもとにあいさつに訪れたという。彼らが寄って立つ基本法の制定に尽力した内田は、神のような存在だった

【*12】内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録（5）」『東京大学史紀要』No.23、2005.3

【*13】藤森照信「佐野利器論」『材料・生産の近代』（東京大学出版会 2005）

【*14】内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録（2）」『東京大学史紀要』No.20、2002.3

【*15】『日本建築家山脈』村松貞次郎著（鹿島出版会 1965）

【*16】内田祥三・村松貞次郎「内田祥三談話速記録（4）」『東京大学史紀要』No.22、2004.3

【*17】内田祥三「東京大学が接収を免れた経緯について」『学士会百年史』（学士会 1991）

【*18】森まゆみ「黎明期の建築家たち 第17回 内田祥三（その2） 息女、松下美柯さんに聞く」『住宅建築』2003.8



上—和野小六邸外観、下—同内観（2点とも東京都公文書館所蔵）内田は、かわり具合によって「あれは自分の設計とはいえない」と言うことがある。美しい姿勢と呼ぶべきだろう。とはいえこれは、当時の建築許可証によれば、内田の設計で、申請代理者は営繕課の奥田芳男。以後、内田が愛用していくスクラッチタイルが、暖炉周りにかすかに現れる。なお、施主の和野は、公爵・木戸孝正の次男。当時、東大航空研究所教授

家”とでもいう形容がしっくりくるほどだ。

とはいえ、それらはたいい、公的な建物であった。他でわずかに知られるものに麻布^{こうがい}町の「内田邸」がある。昭和2年（1927）頃ひとまず完成し、以後1年1室の割で仕上げていったこの「自邸」は、これまで、唯一の住宅作品と考えられてきた。けれど探してみると、これより前に1つある（「和田小六邸」（1924頃）。構造はもちろん鉄筋コンクリート、である。

当時住み心地が懸念された鉄筋コンクリートの住宅を、ならばと、自ら実験台となり計測結果を示し、払拭しようとしたのが「自邸」であった。それに先じたこの住宅は、実験台でこそなかったが、震災の経験から「都心の住宅は鉄筋コンクリートにすべき」と主張する内田の、信念の発露と評すべきものであろう。



木造モルタルは…

ところで、内田の以前、火事の実態は地震以上に把握されていなかった。それは下町に生まれ、火事を「どっさり」[*8] 見た眼にもさすがに分からなかった。炎は、温度は、どんな性状を示すのか——。内田は学科を総動員し、学内に火を放つ大掛かりな実物実験を行った（1933）[*16]。

こうして生まれたのが“木造モルタル”である。この、奇妙なつくり方は、木造都市のやむを得ない現実が生んだ。おそらく、焼夷弾対策となった戦時中の防火改修までのこと、くらいに考えていただろう。内田にとって、“鉄筋コンクリート化”こそが向かうべき道だったからだ。しかし、そこでジワジワと広がったモノは、戦後、立派な“擬土塗り壁”と捉えられ、高度成長の下で爆発的に普及して、全国を覆い尽くした。

結果的に、法をつくったことによって内田は、現在ですら日本中の建築を、あたかも営繕課でそうしたように彼の指揮でつくらせていることになる。けれど、木造モルタルについて、それが営繕課でのことと決定的に違うのは、全く本意ではないことだ。晩年にひと言、「木造モルタル塗構造はやめてしまったほうがいい。ああいうのは推奨すべきではない」[*16]、と漏らした。



低層派による剛なる超高層

都市計画という群造形も随分手掛けた内田はまた、ワイヤー・フレームでの都市の在り方も決めた。

例えば、かつて日本の建物には、超えてはならない高さの規制があった。31m、尺貫法ではキリのよかった100尺。これを曾禰と決め、それは、市街地建築物法が導いた成果とされる丸の内の景観を生む。そのかたわらでこの規制は、内田のある限り決して揺らぐことはないとも考えられた。

ところが事態はにわかに移ろう。経済成長の後押しによって、社会はこれを不当な抑圧と見るようになり、昭和38年（1963）、健在のうちに、取り除かれる日は訪れた。

こうして超高層の時代が幕を開ける。だが内田は、低層派の本丸として、その撤廃には最後まで反対を貫いた。あるべき都市に対する思いもあったに違いない。建物はガッチリしているのが一番と剛構造を信じる眼には、そこで主役に躍り出る、柳に風のごとき柔構造が、受け入れ難く映っていたこともあつただろう。震災の洗礼を受けた彼には、それを経ていない発想との間に、越え難い一線があつた、と言い換えてもいい。

そんな内田は“保険の世界の恩人”といえた。慎重な態度にも増して、先の火災実験以来の貢献は、何よりも彼らにとって貴重だったからだ。自身、防火には最後までかかわる決意でもあった内田に、彼らは有終の舞台を用意して報いた。「第一生命大井本社」[*19]（1967）と「安田火災海上本社」（1976）。超高層である。

しかしこれを転向と見るのは早計で、前者では80mを剛構造で、200mの後者ですら揺れ幅の小ささを求め、完全には柔構造ではないかたちでまとめさせた[*20]。剛なるものへの信仰は生涯変わらず、一徹を貫いたのである。

なお、内田の群造形の側面は、若き日の丹下健三のライバルと目された長男の祥文[*21]が継ぐも、若くして逝く。一方、防火は内田で終わるが、構造、すなわちモノのつくり方については、次男の祥哉[*22]が構法学として展開。納まりを追求した作品を送り続け、その流れは祥士[*23]へと続いている。❁（図版解説も筆者）



左から祥文、美柯、祥哉、美彌、荒井以登（1927年4月10日、工学部四号館にて）（松下美柯氏所蔵）

[*19] これは、60haの都市計画でもあった
[*20] 星野昌一「人間性を追及した意匠設計と防災計画」『近代建築』1976.8
[*21] 内田祥文（1913～46）
内田祥三の長男。日本大卒。東京帝大大学院で都市計画に才能を発揮するも、同大助教職中に急逝
[*22] 内田祥哉（1925～）
内田祥三の次男。東京帝大卒、通信省を経て東大教授。現在、同大名誉教授
[*23] 内田祥士（1955～）
内田祥哉の長男。早稲田大卒、東大大学院中退。現在、東洋大教授

補遺 | 内田先生にたずねる

「ここに銅製のシャッターがあってね、まさに鉄のカーテンでした。隣にロシアがいましたから(笑)」——。

「歳が離れていたせいもあるかもしれないけれどね。僕は兄貴とは随分、話をしましたけど、父と話をしたっていうのはね、あんまりないです。殊に建築の話は」と言うご子息の内田祥哉先生に、「それでも」とご無理を申し上げて伺っていた話が、「自邸」の戦後に及んだ時のことだ。

「洋館はソ連に占領されて、僕たちは隣(和館)に住んでいた」と語るその間には、内田のつくった法によってシャッターが設けられていた。そのシャッターが、図らずも日米安保(1951)以後、住む者だけが知る冷戦の象徴となったというのである。

実際にも、洋館は西で、和館は東にあったから、日ソの地理的關係もそのままに、東西が対峙していたことになる。「自邸」は戦後まもなくGHQに接収。ソ連大使館として10年ほど使われた。「兄貴は死んじゃうし、父はバージで、大学院なんかとても行かれないから就職した」という当時を思い返して、「いろいろ手を加えられたりはしましたが、アメリカ人みたいにペンキ塗ったりはしなかったし、ある意味で、接収されたおかげで、こっち側に住んでいられたのかもしれない」と、その頃、邸宅に対して取られた諸策の中ではまだマシだったと語る。

そんな中、ポツリと、「そう言えば、この書齋の窓から見える「公衆衛生院」(1940)が一番好きだった」と言われた。

もうなくなってしまった「自邸」と“風前のともし火”にある「公衆衛生院」がそういう位置関係にあったことすら気付かなかったが、続く言葉でその理由を、「隣の「伝染病研究所本館」(1937)と合わせるとシンメトリーに見えないところが良いと言っていた」と聞いて驚いた。

なぜなら、内田は、営繕課で若手が少しでもシンメトリーを崩そうとすると怒ったことで知られ、その印象が強すぎて、終生そこにとどまったものばかり思っていたからだ。

それぞれの建築は厳格にシンメトリーを守るが、2つの配置はそうではない。それはおそらく敷地の制約もあったに違いない。それでも、本郷より後の計画となった「公衆衛生院」と「伝染病研究所本館」では、配置に関してシンメトリーを崩す試みが確かにされていたのであった[*1]。思い込みが勝ちすぎて、建築家・内田祥三の重要な展開を見落としていたような気持になった。そこには決して安住することのない建築家の姿勢があつたというべきだろう。

こんなお話も伺った。

複雑怪奇になるばかりの法規に話が及んだ時だ。つくった本人はどう感じだったか。運用が他者に委ねられる中で、きっと思わぬ方向に進んだことも多くあつたに違いない——。

祥哉先生 そんなことは知らないよ(笑)。でも、分かってないで決めるからでしょ？ その場限りで決めていって支離滅裂になっていく。それをまた追っかける。その繰り返しでしょ？

—— 行政にも、「基準法一筋何十年」という人はいなくなっていますからね。最近では、外壁に板を張りたいという要求がありますが、それに対して、簡単にいってしまおうと、「モルタルの上に板を張るなら認めましょう」と指導されることすらあるようです。祥哉先生 え!? 38条[*2]がなくなっちゃったから、かえっておかしなことになっているのかな。

—— 祥三先生は、晩年には「木造モルタルはやめた方がよい」ともおっしゃっておられます。やはりアレは、戦時中辺りまでの飯のものだ、というお考えだったんだろうと思うんです。

祥哉先生 そうです。
—— ただ、お兄さまはアレで学位論文を書かれた[*3]。

祥哉先生 そうそう。だからやっぱり、学位論文でも何でも、技術はね、歴史の中で評価しなくちゃいけない。アレの価値ってのはね、戦争で日本全国火事になって、何とかして木造を防火にしなくちゃいけないという時点で価値があつた。それを、鉄筋コンクリートが増えて延焼の恐れがなくなったのに、そういうことをやり続けているというのは困る。鉄筋コンクリートにしても、あの頃は、本建築、永久建築と考えられたわけで、これ以上のものはないということだね。そういう時代にはそうだった、ということです。



上—内田自邸外観、下—同内観

これはもちろん祥哉先生の言葉だ。しかしその根差すところは、安住しなかった内田に重なる。そしてそれは、祥哉先生が「議論をすると喧嘩になるからね。しません(笑)」とおっしゃるご子息、祥士先生の根にも等しくある。

つまり内田家の遺伝子が発したというべきこの言葉には、きっと祥三先生もうなずいておられるだろう。何でもやった建築家・内田祥三の歩みは、まさしく“技術は歴史の中で評価すべき”の語を地で行くものだったのだから。(文責は筆者)

[*1] 伊藤喜三郎によるパースも描かれ、それが意識的だったことがうかがえる（『内田祥三先生作品集』(内田祥三先生厩舎祝賀記念作品集刊行会、鹿島研究所出版会 1969)）
[*2] 建築基準法第38条。特殊な材料や構造を用いる建築物は建設大臣の認定が必要という規定。基準法を従来の仕様規定から性能規定に移行させるべくなされた平成10年（1998）の改正で削除
[*3] 内田祥文「木造家屋外周の防火に関する実験的研究」（東京大学博士論文 1945）

[*] 裏表紙図版—内田自邸立面図 違ってれば貴重な昭和の遺産となつたはずだが、そのための努力は個人の範疇を遥かに超え、バブル経済の下、やむなく取り壊された。現在は、令嬢、美柯さん（故・松下清夫夫人）により、部分的に同地に復元。齢90に近い美柯さんからは、ご尊父を愛されるお気持ちがヒシヒシと伝わる。なお、そうして保管されていた膨大な史料は、今や、得難い近代建築史の証人となっている



左から長女・美柯（みえ）、妻・美彌（みね）、内田、次男・祥哉、義妹・荒井以登、長男・祥文(1932年2月11日、自宅(和館)にて) (3点とも松下美柯氏所蔵)



上—大階段 現在でも「荘厳な」という形容が似つかわしいが、往時、ここは、光天井から降り注ぐ光に満ちていた。荘厳そのものの空間であっただろう
下—正面外観 ファサードは、書棚に並んだ本をイメージしたとも伝えられる

東京大学図書館 (現・総合図書館)

【建築概要】
所在地：東京都文京区本郷7-3-1
規模：地下1階、地上3階、一部5階
構造：SRC造
竣工年：1928年



エントランス周り この図書館の設計では、弟子たちによる内輪のコンペも行われ、岸田の案が1等となるが、敷地の変更などの紆余曲折の中で、内田が「あまり名案ではない」として却下。最終的には内田主導の案に収斂され、「大学にある建物で僕が一番力を入れた」と語るとおり、渾身の一作の誕生となった。なお、工事では徹底した合理化に取り組み、浮かした分を丸輪のある噴水やパゴラといった現在に遺る設えに充てた。担当者に、岸田日出刀、大村巳代治、渡辺要ら

東京大学法文経一号館 (現・法文一号館)

【建築概要】
所在地：東京都文京区本郷7-3-1
規模：地下1階、地上3階
構造：SRC造
竣工年：1935年



「法文経二号館」(1938)のアーケードから「法文経一号館」を見る。この尖頭アーチのアーケードの連続する様は、いろいろ試みているうちに「ゴシックが一番しっくりくると感じるようになった」と語る内田の都造形の醍醐味といえるだろう。なお、現在では大谷幸夫による「文学部三号館」(1987)も加わり、歴史の重層するアーチの競演が見られる。担当者に、日下部東一郎、柳瀬駿



玄関ホールから正門を見る



上—正門のグリル 武田五一によるスパニッシュで知られる「東方文化学院京都研究所」(1930)に対して、こちらは日本趣味を基調とした東洋式というべきもの。内部にも和の意匠が散りばめられた
下—正門から玄関を見る



東方文化学院東京研究所 (現・拓殖大学国際教育会館)

【建築概要】

所在地：東京都文京区大塚1-7-1

規模：地上3階

構造：RC造、一部SRC造

竣工年：1933年



北東面全景 企画の中心にいた滝精一からの「屋根をつけてほしい」との要望が決め手となったこの建物は、内田自身にとって、「塚本靖邸文庫」(1914)に始まり「東大柔剣道場」(1938)へと至る、屋根への取り組みの過程に位置する。しかし、それ以上に指摘しておくべきは、内田が、ここでの検討が審査を務めた東京帝室博物館コンペ(1931)の要項に反映された、と語っていること。つまり、この建物は、日本趣味意匠の一つの到達点である「東京帝室博物館」(1937、設計：渡辺仁)への実験的な意味合いを持つことになる



左—エントランス周り これで全面スクラッチタイル張りなら、本郷の「東大工学部四号館」(1927)と見分けがつかまい
右—事務棟入り口

講堂への渡り廊下

東京高等農林 (現・東京農工大学農学部本館)

【建築概要】

所在地：東京都府中市幸町3-5-8

規模：地上2階、一部3階

構造：RC造、一部SRC造

竣工年：1934年

正面外観 内田の設計は、全部東大本郷キャンパスと同じ、と評されることがある。しかし、「同じものを」と求められ、そうなった面もある。それらの設計では、配置にこだわりを見せながらも、建築については、さまざまな配慮から仕上げや詳細の程度が落とされた。ここでは、ピナクル（小尖塔）や尖頭アーチが排除されるなど、ゴシックが強調されず、モダニズムに通じるものすら感じさせる。しかし、内田の設計姿勢に照らせば、そこを目標したものでないことは明らかで、その意味で内田らしさを十分に味わえる建築である。ちなみに東京高等農林は、昭和10年（1935）、東大農学部実科から独立して誕生





1



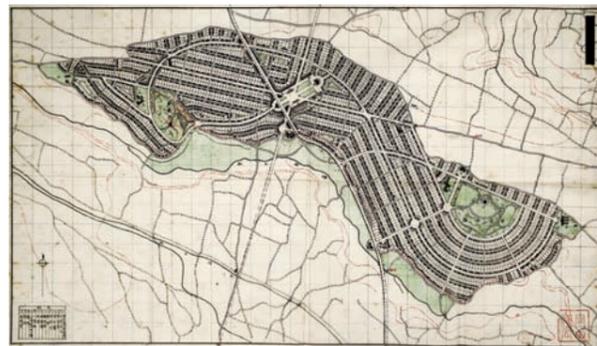
2



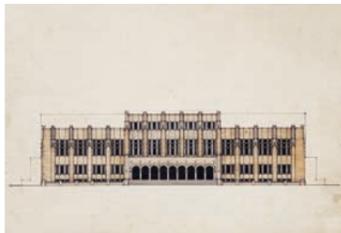
3



4

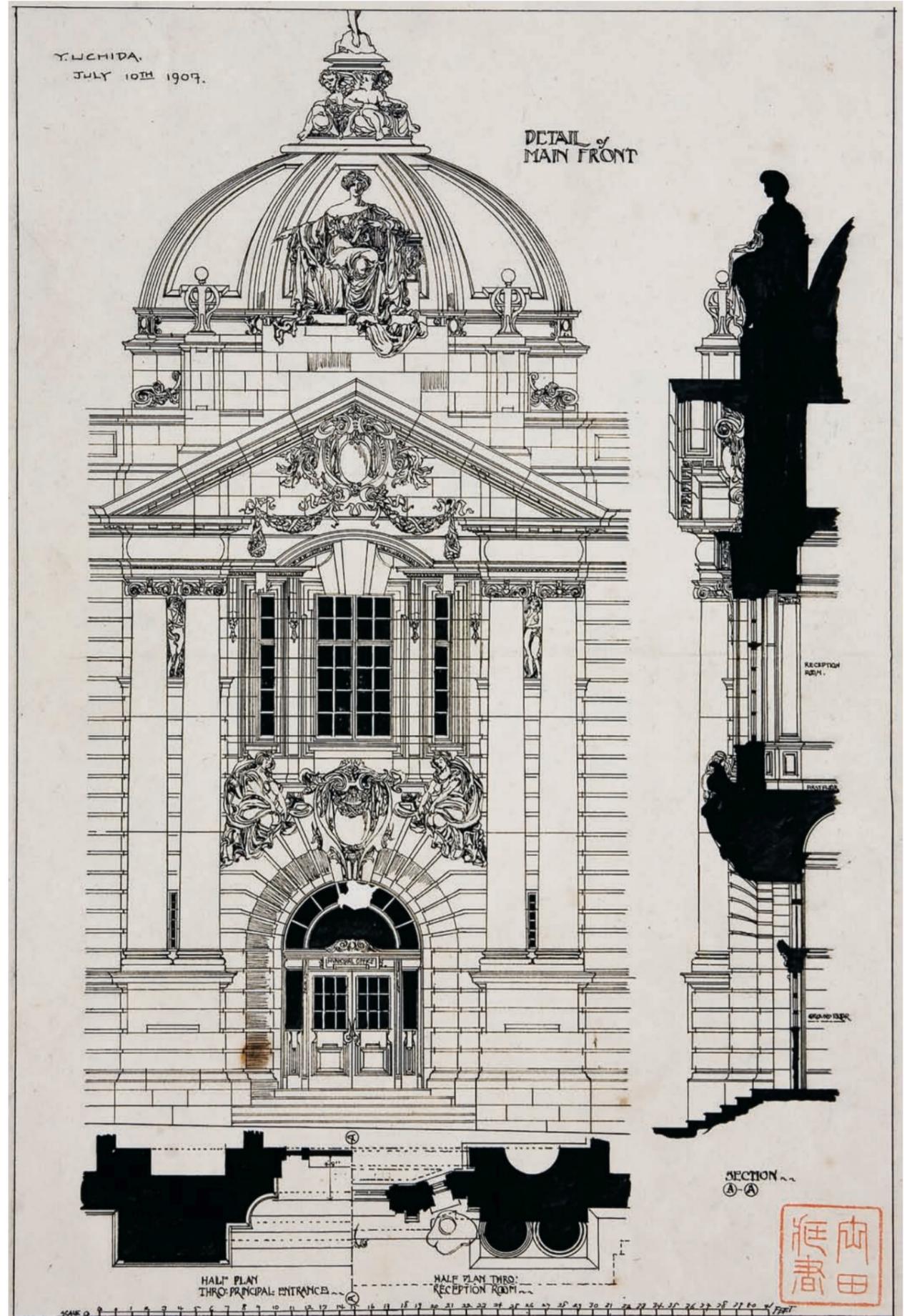


5



6

- 1 東大本郷キャンパス構想図(1931以前) 岸田の手による。「群造形こそが真骨頂」と語る内田にとって、これをまさに自分自身であったらう(東大建築学科所蔵)
- 2 右— 済南領事館(1918)、左— 同食堂 内田にしては珍しいレンガ造だが、設計の時期(1916)を考えればやむを得ない。内田の手控えには「Planは全部内田が設計、Elevは大部分内田、室内は1/3内田」とある。なお、ステンドグラスは、野田俊彦による。「建築非芸術論」で知られる一方で、十分な画才を持つ野田に、内田が、「これは建築ではなく、工芸品だから」と言い添えて依頼したもの。昭和12年(1937)12月25日、戦禍で焼失(東大建築学科所蔵)
- 3 一高時代の製図(1903頃) 小学校以来、絵は描いたことがない内田も、「製図の点は良い方だった」という。ちなみに、内田が遺したこの種の製図は、小島憲之によって、どのような工学教育がなされていたかを知る上でも貴重な史料である(東大建築学科所蔵)
- 4 大学3年設計課題 邸宅(1906) 内田の眉寿を祝って弟子たちが企画した「内田祥三先生作品集」に掲載されるべく検討が進められるも、最後の最後に除かれた。従って本邦初公開となるが、それが内田の意に反しないことを祈りたい。なお、これが内田の設計なのか、実際にあるもののコピーなのかは不明(東京都公文書館所蔵)
- 5 大都市における住宅の補給策(1922) 本人の手によるか否かは不明だが、大都市の住宅不足が指摘されていた大正期に、内田が発表した田園都市の計画案。想定したのは下高井戸付近。内田はこの至近に土地を得ており、よく知る土地に計画したことになる。なお、そこには後、「祥哉自邸」(1961)が建つ(東京都公文書館所蔵)
- 6 東大図書館計画案(大正末) 建築家として1/200の図面までは自分で描くことにこだわり、それをこくわずかの時間で手際良く描いたという。ちなみに、2階の階高の高い下の案が実施案に近い(東大建築学科所蔵)



大学3年時の製図(1907) この種の図面を内田は膨大に遺した。習作に次ぐ習作という努力によって、「絵としての設計」に対する苦手意識を克服したという言葉の重みが、説得力を伴って迫る(東大建築学科所蔵)

内田祥三 人と作品

1885-1972

【特集1】

生き続ける建築 6

略歴

- 1885年(明18) 東京深川に生まれる
- 1904年(明37) 東京帝国大学工科大学(以下、東大)建築学科入学
- 1907年(明40) 東大建築学科卒業。三菱合資会社技師
- 1910年(明43) 東大大学院入学。東京市建築条例案起稿委員会※1嘱託員
- 1911年(明44) 東大講師。陸軍經理学校講師
- 1914年(大3) 東京大正博覧会審査官※2
- 1916年(大5) 東大助教授
- 1917年(大6) 震災予防調査会※3臨時委員
- 1918年(大7) 論文「建築構造特に壁体および床に関する研究」で工学博士
- 1921年(大10) 東大教授。東京高等工業学校講師
- 1922年(大11) 平和記念東京博覧会審査官※2。都市計画局事務扱※4
- 1923年(大12) 東大営繕課長。国宝に関する調査※3嘱託
- 1924年(大13) 災害防止調査委員会※1委員。震害調査委員※5。対支文化事務局事務※6嘱託。同潤会理事
- 1925年(大14) 建築学会副会長
- 1929年(昭4) 東大建築学科教室主任。臨時正倉院宝庫調査委員会※6委員
- 1933年(昭8) 日本学術振興会常置委員会委員。工業博物館建設に関する調査委員※1・8
- 1934年(昭9) 小住宅の建築および維持に関する研究調査委員会※9委員長。耐風構造に関する木造規準委員会※1委員長
- 1935年(昭10) 建築学会会長。第12回国際オリンピック大会招致委員会幹事
- 1936年(昭11) 都市計画東京地方委員会※4委員。建築行政協会顧問
- 1937年(昭12) 紀元2600年記念日本万国博覧会委員。東京府防空委員会※4委員
- 1938年(昭13) 東大評議員。満州国および中華民国出張
- 1939年(昭14) 建築学会会長(再任)。名古屋大学営繕顧問。美観審査委員会※10委員。工業品規格統一調査会※11委員
- 1940年(昭15) 建築学会学術賞(「木造家屋火災の本質に関する研究」)
- 1941年(昭16) 東大工学部長。住宅営団評議員※12
- 1942年(昭17) 東大第二工学部兼任。日本生活科学会理事。科学技術審議会※13委員
- 1943年(昭18) 東大総長。叙高等官一等。住宅営団理事
- 1945年(昭20) 東大総長を退官
- 1946年(昭21) 東大文教地区計画委員会参与。工業標準調査会※11委員。叙勲一等授瑞宝章。日本損害保険協会技術顧問
- 1947年(昭22) 公職追放
- 1950年(昭25) 公職追放解除。日本火災学会委員長。東京都建築審査会委員。文化財専門審議会※3専門委員
- 1951年(昭26) 法隆寺国宝保存委員会※3顧問。東大名誉教授。中央建築士審議会※14委員。日本都市計画学会会長。文化財保護委員会※3委員
- 1952年(昭27) 文化財協会顧問。日本住宅協会理事・副会長。都市不燃化同盟顧問。東京都耐火建築促進審議会委員
- 1954年(昭29) 東京都収用委員会委員。都市計画協会評議員
- 1955年(昭30) 東京消防庁予防対策委員会委員長。日本住宅公団管理委員会委員長
- 1956年(昭31) 日本科学防火協会名誉会長。工業標準化への貢献により藍綬褒章
- 1957年(昭32) 日本学士院会員。消防審議会※15委員。表宮殿造営の調査に関する顧問※7
- 1959年(昭34) 正倉院評議会※7会員。皇后造営審議会※7委員。震災予防協会顧問。首都高速道路公団技術委員会委員
- 1960年(昭35) 東京不燃都市建設促進会顧問。宮殿造営に関する首席顧問※7



建築二八会(戦前) 「建築二八会」とは、昭和3年の東大卒業生たちの同窓会のこと。卒業年の1928と、28名の卒業生にかけての命名である。彼らはしばしば内田ら先生たちを招き同窓会を催した。ちなみに、前列左から武藤清、岸田日出刀、内田祥三、佐野利器、石井柏亭こと満吉。後列には、市浦健、前川國男、太田和夫、横山不学、吉村辰夫、谷口吉郎らの顔が見える(市浦ハウジング&プランニング所蔵)

- 1961年(昭36) 首都圏不燃建築公社評議員
- 1966年(昭41) 都市再開発促進会顧問。日本火災学会名誉会長
- 1972年(昭47) 文化勲章受賞。逝去(88歳)

※1:建築学会、2:農商務省、3:文部省、4:内務省、5:土木学会、6:外務省、7:宮内省(庁)、8:工学会、9:同潤会、10:警視庁、11:商工省、12:厚生省、13:内閣、14:建設省、15:国家公安委員会

主な作品

所在の記入がないものは東京

- 1912年(明45) 所沢飛行船格納庫(埼玉)
- 1918年(大7) 済南領事館(中国)
- 1924年(大13) 東大工学部二号館、和田小六邸
- 1925年(大14) 東大講堂、東大工学部列品館
- 1927年(昭2) 浴風園、内田自邸、東大工学部四号館
- 1928年(昭3) 東大図書館、東大付属病院内科病室、東大地震研究所本館
- 1929年(昭4) 東大航空研究所一号本館
- 1930年(昭5) 上海自然科学研究所(中国)
- 1931年(昭6) 東大医学部一号館、中山法華経寺聖教殿(千葉)(伊東忠太と共同設計)
- 1932年(昭7) 天理学園(奈良)、東大医学部付属病院放射線療法病室、東大理学部臨海実験所水族室(神奈川)
- 1933年(昭8) 東方文化学院東京研究所、第一高等学校本館
- 1934年(昭9) 癌研究会付属癌研究所及康楽病院、東京高等農林学校、東大理学部二号館
- 1935年(昭10) 第一高等学校図書館、東大法文経一号館、東大工学部一号館、東大弓場
- 1936年(昭11) 東大理学部臨海実験所(神奈川)、東大農学部一号館・二号館
- 1937年(昭12) 東大付属病院東病室、東大付属病院分院新本館、伝染病研究所本館、都市保健館
- 1938年(昭13) 第一高等学校講堂、東大法文経二号館、東大柔剣道場、東大医学部本館
- 1939年(昭14) 東大理学部植物園、東大工学部三号館、紐育万国博覧会日本特設館・柔港万国博覧会日本特設館(アメリカ)(伊東忠太・大熊喜邦と共同設計)
- 1940年(昭15) 東大工学部六号館、公衆衛生院
- 1941年(昭16) 東大農学部三号館
- 1953年(昭28) 日立製作所小平記念館(茨城)

取材協力・資料・写真提供

市浦ハウジング&プランニング/内田祥哉/川澄明男/拓殖大学/東京都公文書館/東京大学/東京大学建築学科図書室/東京大学生産技術研究所藤森研究室/東京農工大学/松下美柯/「内田祥三先生作品集」(内田祥三先生追善祝賀記念作品集刊行会、鹿島研究所出版会 1969)/「日本の建築 明治大正昭和 8 様式美の挽歌」伊藤三千雄・前野義著(三省堂 1982) (50音順)

【次号予告】

次号(2008年1月20日発行)の「生き続ける建築」は藤井厚二です。

*特に明記のない写真は、2007年8、9月に新規撮影したものです。